

平成28年木造建築士試験

試験場	受験番号	氏名
	—	

問題集

学科Ⅲ（建築構造）

学科Ⅳ（建築施工）

次の注意事項及び答案用紙の注意事項をよく読んでから始めて下さい。

〔注意事項〕

1. この問題集は、学科Ⅲ（建築構造）及び学科Ⅳ（建築施工）で一冊になっています。
2. この問題集は、表紙を含めて14枚になっています。
3. この問題集は、計算等に使用しても差しつかえありません。
4. 問題は、全て五枝択一式です。
5. 解答は、各問題とも一つだけ答案用紙の解答欄に所定の要領ではっきりとマークして下さい。
6. 解答に当たり、適用すべき法令については、平成28年1月1日現在において施行されているものとします。
7. 解答に当たり、地方公共団体の条例については、考慮しないことにします。
8. この問題集については、試験終了まで試験室に在室した者に限り、持ち帰りを認めます（中途退出者については、持ち帰りを禁止します）。

学科Ⅲ（建築構造）

〔No. 1〕 木造建築物に作用する荷重及び外力に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 床の単位面積当たりの固定荷重は、一般に、床梁の張り間(スパン)が大きいほど大きい。
2. 床の単位面積当たりの積載荷重は、一般に、「教室」に比べて、「住宅の居室」のほうが大きい。
3. 雪下ろしを行う慣習のある地方においては、所定の垂直積雪量を減らして積雪荷重を計算した建築物については、その出入口等に軽減の実況等を表示する。
4. 積雪荷重は、屋根に雪止めがなく、屋根勾配が60度を超える場合、零とすることができる。
5. 建築物に作用する地震力は、同じ規模の建築物の場合、一般に、鉄筋コンクリート造建築物より木造建築物のほうが小さい。

〔No. 2〕 木造建築物に作用する地震力及び風による水平力等に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 片流れの屋根面に作用する風圧力は、作用する風の方向によって、正圧にも負圧にもなる。
2. 風による水平力は、一般に、2階部分より1階部分のほうが小さい。
3. 地震力は、一般に、2階部分より1階部分のほうが大きい。
4. 地震力及び風による水平力は、建築物に対して、短期に生ずる力として考える。
5. 地震力及び風による水平力に対する検討は、建築物の張り間方向及び桁行方向のそれぞれについて行う。

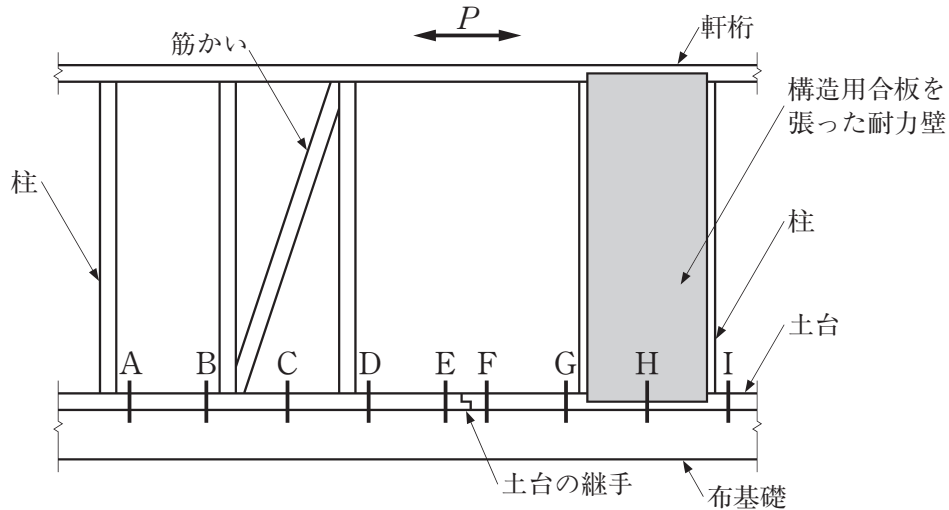
〔No. 3〕 木造建築物における部材等の名称とそれを使用する部位等との組合せとして、**最も不適当なものは、次のうちどれか。**

1. ひねり金物 ————— 小屋組
2. 胴縁 ————— 外壁
3. 羽目板 ————— 床組
4. 鼻隠 ————— 屋根
5. 落とし掛け ————— 床の間

〔No. 4〕 木造2階建て住宅における地盤又は基礎に関する次の記述のうち、**最も不適当なもの**はどれか。ただし、構造計算は行わないものとする。

1. 地盤の支持力(地耐力)を確認するために、スウェーデン式サウンディング試験を行った。
2. 設計上のべた基礎の底盤直下から深さ1.5 mまでの地盤が軟弱であったので、べた基礎の施工に先立ち、浅層混合処理工法(表層改良)による地盤改良を行った。
3. 布基礎の床下換気孔まわりの補強筋として、D13の横筋とD10の斜め筋を用いた。
4. べた基礎の立上り部分の高さを、地上部分で40 cmとした。
5. 地盤の長期許容応力度が 25 kN/m^2 であったので、底盤の幅70 cmの鉄筋コンクリート造の布基礎とした。

[No. 5] 図のような耐力壁と筋かいをもつ木造の軸組に、水平力 P が作用するとき、アンカーボルトの位置A～Iの組合せとして、最も適切なものは、次のうちどれか。ただし、図中の各部材の接合部には、必要な金物を使用されているものとする。



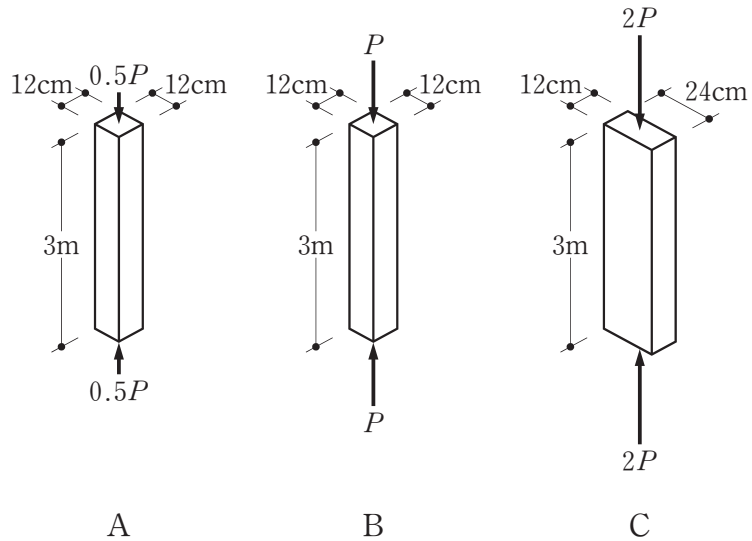
1. A、C、E、H、I
2. A、D、F、G、I
3. B、D、E、G、I
4. B、D、E、F、H
5. B、D、F、G、I

[No. 6] 木造軸組工法による建築物の柱又は横架材に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 柱は、横架材や筋かい等と一体となって、水平力に対して抵抗する軸組の一部である。
2. 添え柱は、大きな荷重を受ける小屋梁や床梁を支える柱の補強のために設ける。
3. 母屋の継手は、小屋束間の中央部付近を避けて設ける。
4. 床の振動(上下動)を小さくするためには、床梁の材せいを大きくするよりも、床梁の材幅を大きくするほうが効果的である。
5. 柱の断面寸法(小径)は、横架材間の垂直距離によらず、構造計算によって決定してもよい。

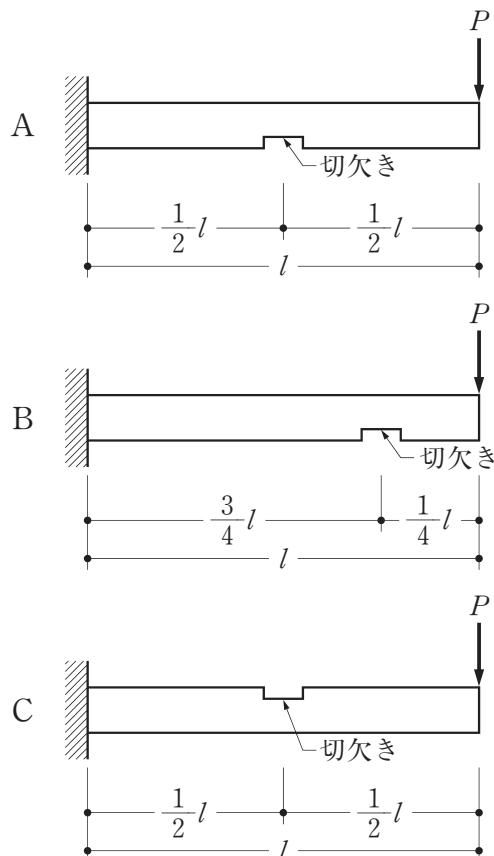
[No. 7] 図のような両端から荷重 $0.5P$ 、 P 又は $2P$ を受ける木造の柱 A、B 及び C の座屈のしにくさの大小関係として、正しいものは、次のうちどれか。ただし、全ての柱の材質、支持条件は同一とし、荷重は図心にかかるものとする。

1. $A > B = C$
2. $A = C > B$
3. $B = C > A$
4. $C > A = B$
5. $C > B > A$



[No. 8] 荷重 P を受ける製材(木材)の片持ち梁において、図のように切欠きを設けた場合、梁 A ~ C の曲げモーメントに対する強さの大小関係として、正しいものは、次のうちどれか。ただし、梁は等質で等断面であり、切欠きの形状・寸法は、いずれも「幅は $\frac{1}{10}l$ 、深さ(高さ)は梁せいの $\frac{1}{4}$ 」とし、梁の自重は無視するものとする。

1. $B > C > A$
2. $C > B > A$
3. $C > A > B$
4. $A > B > C$
5. $B > A > C$



[No. 9] 木造軸組工法による建築物において、建築基準法に基づく「木造建築物の軸組の設置の基準(4分割法)」に従った軸組配置の検討に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 図-1のような平面を有する建築物において、桁行方向の計算に用いる側端部分は、建築物の両端(最外縁)から $\frac{1}{4}$ の部分(■部分)とした。
2. 図-1のような平面を有する建築物において、桁行方向の存在壁量を計算する場合の耐力壁の長さは、桁行及び張り間両方向の耐力壁の長さの合計とした。
3. 図-2のような2階建ての建築物の1階側端部分の必要壁量の算出に当たって、aの部分については2階建ての1階部分として算出した。
4. 図-2のような2階建ての建築物の1階側端部分の必要壁量の算出に当たって、bの部分については平家建て部分として算出した。
5. 各側端部分について、存在壁量を必要壁量で除して壁量充足率を算出した。

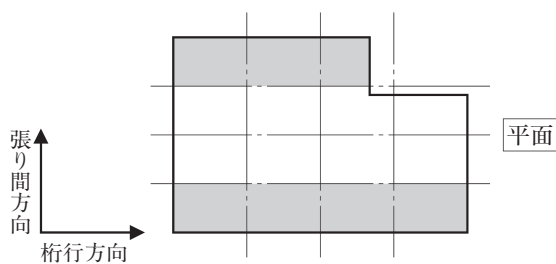


図-1

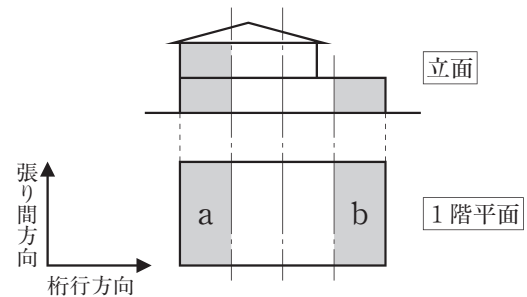
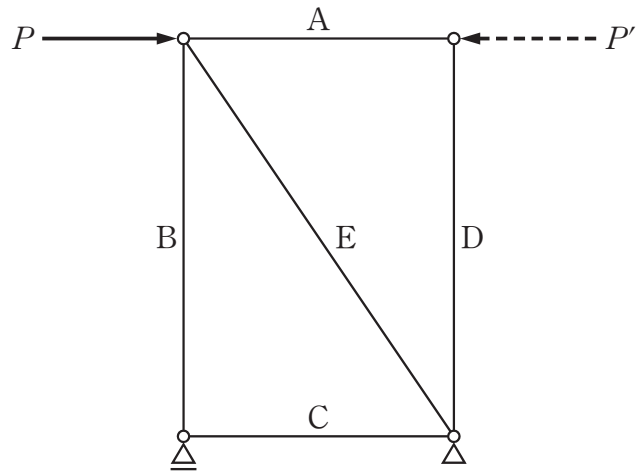


図-2

[No. 10] 木造軸組工法による建築物の耐力壁に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 断面寸法9 cm角の筋かいが取り付く通し柱と胴差との仕口部分を、ホールダウン金物(引寄せ金物)を水平に用いて補強した。
2. T字形の平面形状を有する建築物であったので、その平面を二つの長方形の区画に分割し、それぞれの区画で壁量を満足するように耐力壁を配置した。
3. 木材を所定の方法により縦横に組んだ格子壁を設けた軸組を、耐力壁とした。
4. 断面寸法3 cm×9 cmの筋かいを、柱及び横架材を欠き込んで、それぞれに対してN65釘5本を平打ちして留め付けた。
5. 真壁造の土塗壁を耐力壁とするため、土塗壁の材料や貫・小舞竹等の施工方法は、所定の基準に適合するものとした。

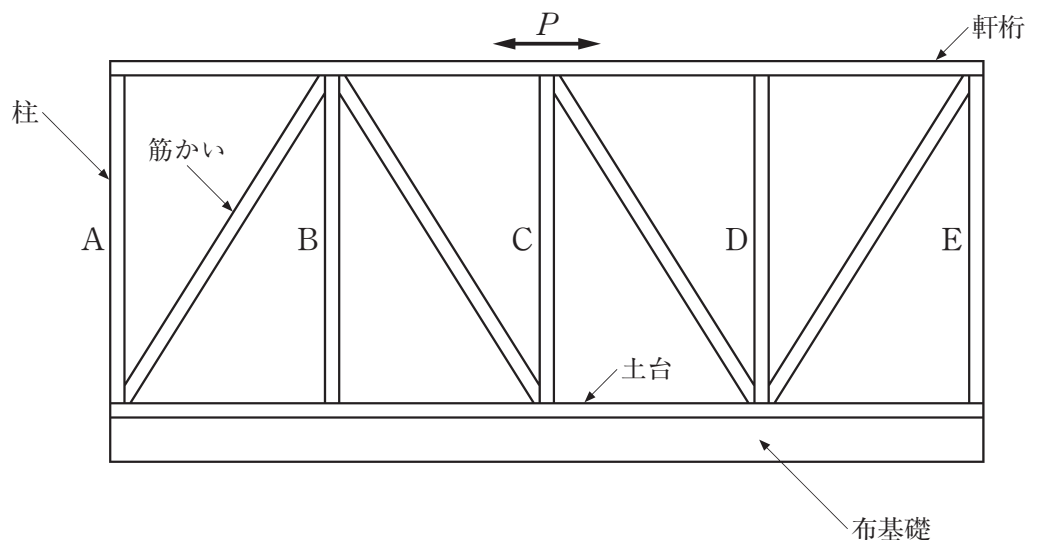
[No. 11] 図のような軸組における部材A～Eについて、水平力 P 又は P' が交互に作用することによって生じる軸力に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。



1. 部材Aには、水平力 P' によって、圧縮力が生じる。
2. 部材Bには、水平力 P' によって、圧縮力が生じる。
3. 部材Cには、水平力 P によって、引張力が生じる。
4. 部材Dには、水平力 P 又は P' によって、軸力が生じない。
5. 部材Eには、水平力 P によって、圧縮力が生じる。

[No. 12] 平家建ての木造建築物において、図のような外周部の軸組に水平力 P が作用した場合、柱A～Eについて、柱の脚部に生じる引抜き力が、最も大きいものは、次のうちどれか。ただし、木材の筋かいの断面寸法は全て $4.5\text{ cm} \times 9\text{ cm}$ とし、図中の各部材の接合部には、必要な金物を使用されているものとする。

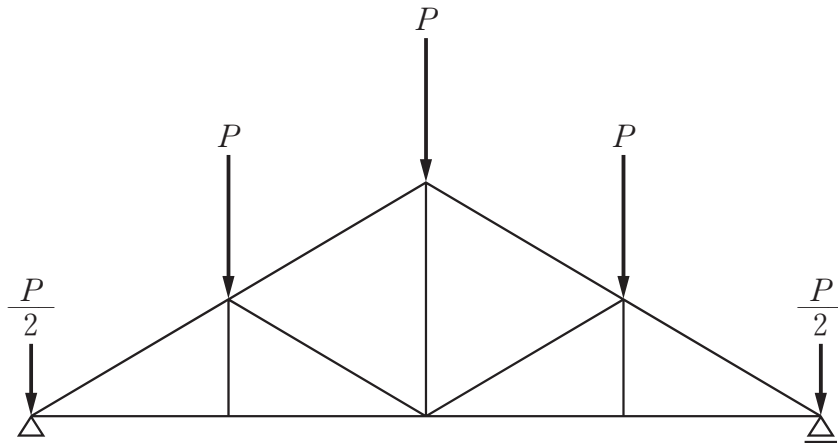
1. A
2. B
3. C
4. D
5. E



[No. 13] 木造建築物の小屋組に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. うし梁(敷梁)は、長大にわたる小屋梁を中間で支持する直交梁である。
2. 与次郎組には、棟持ち柱式、天秤梁式^{びん}などがある。
3. 京呂組は、小屋梁を柱で直接支える構法である。
4. さす組は、2本の斜材と小屋梁等で三角形の骨組を構成する小屋組である。
5. 雲筋かいは、小屋組の変形を防ぐために設ける斜材である。

[No. 14] 図のような荷重が作用する小屋組に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。



1. 屋根勾配が小さくなると、陸梁^{ろく}に作用する力は小さくなる。
2. 屋根勾配が小さくなると、合掌に作用する力は大きくなる。
3. 屋根勾配が大きくなると、方づえに作用する力は小さくなる。
4. 屋根勾配にかかわらず、真束に作用する力は変わらない。
5. 屋根勾配にかかわらず、支点に作用する力は変わらない。

〔No. 15〕 木造軸組工法の建築物における床組に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 床組の水平剛性は、床面材の種類、根太間隔及び釘打ちの方法が同一の場合、根太の床梁への取付方法(納まり)により異なる。
2. 梁床は、一般に、張り間(スパン)が2～5 m位までの床組に用いられる。
3. 組床は、一般に、張り間(スパン)が6 m位までの室面積の大きな場合に用いられる。
4. 根太床は、一般に、張り間(スパン)が4～6 m位までの床組に用いられる。
5. 転ばし床は、床束を用いず、土間コンクリート等の上に直接組む床組である。

〔No. 16〕 枠組壁工法による建築物に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。ただし、構造計算は行わないものとする。

1. 耐力壁線に設ける全ての開口部の幅をそれぞれ4 m以下とし、かつ、その幅の合計を当該耐力壁線の長さの $\frac{4}{5}$ とした。
2. せっこうボード張り耐力壁のせっこうボードの取付けに、GNF40 釘を用いた。
3. 床を構成する床根太の間隔を455 mmとしたので、床材(床下張り材)として、厚さ12 mmの構造用合板を用いた。
4. 耐力壁線により囲まれた部分の水平投影面積を、40 m²とした。
5. 耐力壁線に設ける幅90 cm以上の開口部の上部には、たて枠と同じ寸法型式のまぐさ受けで支えられたまぐさを設けた。

〔No. 17〕 木造軸組工法による2階建ての建築物の構造計画に関する次の記述のうち、**最も不適当なものはどれか。**

1. 耐力壁線相互の間隔が8 m以下となるように、平面を計画した。
2. 敷地が軟弱な地盤であったので、建築物に配置する耐力壁の量を増やした。
3. 屋根を金属板葺としたので、垂木と母屋、母屋と小屋束等の接合部は、瓦葺の場合に比べて強固に緊結した。
4. 2階部分がセットバックしていたので、2階部分からの力を伝達できるように、セットバックした部分の水平構面の剛性を確保した。
5. 平面的な剛性分布のバランスの指標である偏心率が0.3を超えるように、耐力壁を配置した。

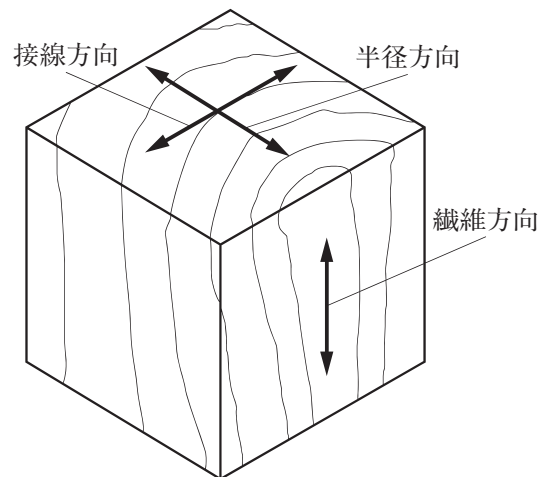
〔No. 18〕 木造軸組工法による2階建ての既存建築物の耐震性を向上させる方法として、一般に、**最も効果の低いものは、次のうちどれか。**

1. 無筋コンクリート造の布基礎であったので、あと施工アンカーによる差し筋を行い、新たに鉄筋コンクリート造の布基礎を抱き合わせた。
2. 大きな吹抜け部分を、火打金物や構造用合板を張り付けたキャットウォークを用いて補強した。
3. 1階の床下地材を、小幅板から構造用合板に張り替えた。
4. 耐力壁が設置された下屋の屋根下地材を、小幅板から構造用パネルに張り替えた。
5. 足固めのない玉石基礎であったので、地盤面上に一体の鉄筋コンクリート造の底盤を設け、足固め・接合金物等を用いてその底盤と柱脚部とを緊結した。

〔No. 19〕 木造建築物の各部における鉛直荷重による力の流れとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 1階床荷重(束立て床・べた基礎)
床板 → 根太 → 大引 → 鋼製束 → 基礎スラブ
2. 2階床荷重(組床)
床板 → 根太 → 小梁 → 大梁 → 胴差 → 柱
3. 1階天井荷重
天井板 → 野縁 → 野縁受 → 吊木^{つり} → 吊木受^{つり} → 梁
4. 屋根荷重(和小屋寄棟)
野地板 → 配付け垂木 → 隅木 → 母屋^{もや} → 小屋束 → 飛梁 → 軒桁
5. 屋根荷重(洋小屋)
野地板 → 垂木 → 母屋^{もや} → 陸梁^{ろく} → 合掌 → 敷桁 → 柱

〔No. 20〕 図のような立方体の木材が乾燥して収縮する場合、各方向の収縮の大きさの大小関係として、正しいものは、次のうちどれか。



1. 接線方向 > 半径方向 > 繊維方向
2. 半径方向 = 接線方向 > 繊維方向
3. 接線方向 > 半径方向 = 繊維方向
4. 半径方向 > 繊維方向 > 接線方向
5. 繊維方向 > 接線方向 > 半径方向

〔No. 21〕 木材の一般的な性質に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 木材の含水率が繊維飽和点以下の場合、強度は含水率の低下に伴って高くなる。
2. 木材の繊維方向の曲げ及びせん断の基準強度並びに繊維直交方向のめり込みの基準強度の大小関係は、一般に、曲げ > めり込み > せん断である。
3. ある一定以上の荷重を継続して木材に加えた場合、時間の経過とともに変形が増大する現象を、クリープという。
4. 断面が大きい木材を燃焼させる場合、木材の燃焼面から炭化するが、その速度は1分間に6 mm程度である。
5. 木材の熱伝導率は、普通コンクリートの熱伝導率に比べて小さい。

〔No. 22〕 木質材料に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. CLT(直交集成板)は、挽板^{ひき}を幅方向に並べたものを繊維方向が直交するように積層接着したものである。
2. 「集成材の日本農林規格(JAS)」による接着の程度の表示が「使用環境C」である集成材は、直接外気にさらされる環境での使用に適している。
3. 「合板の日本農林規格(JAS)」における化粧ばり構造用合板は、構造用合板の表面又は裏面に、木材質特有の美観を主な目的とした単板をはり合わせたものである。
4. 「日本工業規格(JIS)」における繊維板は、密度・用途・製法によってインシュレーションボード、MDF及びハードボードに区分される。
5. 「フローリングの日本農林規格(JAS)」におけるフローリングは、ホルムアルデヒド放散量の大小によって性能区分される。

[No. 23] 木造建築物の腐食・防腐・防蟻に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 「ひのき」や「ひば」の辺材は、一般に、耐腐朽性・耐蟻性に優れている。
2. 外壁をモルタル塗り仕上げとする場合の軸組の腐朽防止には、通気構法が有効である。
3. ヒラタキクイムシは、ラワンなどの広葉樹を食害する。
4. 加圧式防腐処理木材を現場で切断加工した場合、切断面については再度防腐処理を行う必要がある。
5. 木材の腐朽菌は、酸素、温度、水分及び栄養素の全ての条件が満たされた環境下でなければ繁殖しない。

[No. 24] コンクリートに関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. スランプ値は、スランプコーンを引き上げた後のコンクリート中央部の盛上がり高さで表される。
2. ブリーディングは、コンクリートの打設後に練混ぜ水の一部が分離して、コンクリートの上面に上昇する現象である。
3. コンクリートの中性化は、空気中の二酸化炭素などにより、コンクリートのアルカリ性が失われる現象である。
4. コンクリートは、セメントと水が水和反応することによって発熱する。
5. コールドジョイントは、コンクリートの打継ぎ部分に生じる一体化していない継目のことである。

〔No. 25〕 建築材料に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. せっこうプラスターは、一般に、セメントモルタルに比べて、硬化時間が短い。
2. 改質アスファルトルーフィングは、アスファルトに合成ゴムや合成樹脂を添加して、低温性状や高温性状を改良したルーフィングである。
3. せっこうボードは、せっこうを芯として両面をボード用原紙で被覆したものであり、一般に、防火性は低い。
4. ALCパネルは、耐火性及び断熱性に優れているが、吸水性が高いので、寒冷地では凍害を受けるおそれがある。
5. 網入り板ガラスは、割れてもガラスが飛散しにくいので、防火用のガラスとして用いられる。

学科IV（建築施工）

〔No. 1〕 工事現場の安全確保に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. スレート葺の屋根の上での作業において、踏み抜きによる危険を及ぼすおそれがあったので、幅 30 cm の歩み板を設け、防網を張った。
2. 高さ 2 m の作業場所で、足場用墜落防止設備を設けることが困難であったので、安全帯を取り付けるための設備を設け安全帯を使用させた。
3. 移動はしごについては、幅を 24 cm とし、脚部に滑り止め装置を取り付けた。
4. 足場の組立てについては、足場の組立て作業の特別教育を受けた者をその作業に就かせた。
5. 軒の高さ 6.5 m の木造建築物の建方であったので、所定の作業主任者の指揮のもとで行わせた。

〔No. 2〕 仮設工事の安全確保に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 単管足場の壁つなぎの間隔は、垂直方向 5 m、水平方向 5.5 m とした。
2. 架設通路の勾配が 25 度であったので、踏棧その他の滑り止めを設置しなかった。
3. 作業者の墜落の危険がある箇所の手摺すりの高さは、90 cm とした。
4. 単管足場の作業床の幅は、40 cm とした。
5. 単管足場の建地間の最大積載荷重は、400 kg とした。

〔No. 3〕 木造 2 階建て住宅における土工事・地業工事等に関する次の用語の組合せのうち、最も不適当なものはどれか。

1. 地盤調査 ————— 標準貫入試験
2. 山留め ————— 切梁
3. 遣方やりかた ————— ベンチマーク
4. べた基礎の根切り ————— つぼ掘り
5. 捨てコンクリート地業 ————— 墨出し

〔No. 4〕 木造2階建て住宅におけるべた基礎工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 基礎スラブ面は、建築物周囲の地盤より50 mm高くした。
2. アンカーボルトのコンクリートへの埋込み長さを、200 mmとした。
3. 根入れ深さを、250 mmとした。
4. 立上り部分の厚さを、150 mmとした。
5. 基礎スラブの厚さを、200 mmとした。

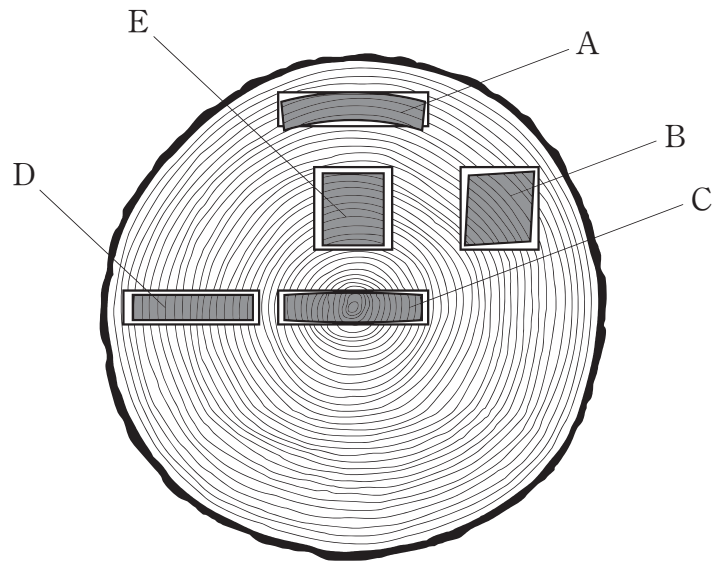
〔No. 5〕 木造住宅における木材の一般的な使い方等として、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 継手の相互の材については、別れ継ぎ(元口と元口)を避ける。
2. 濡れ縁などの雨掛り部分には、白太材を使用する。
3. 木表にかんな削りをするときは、末口から元口へと削る。
4. 柱は、末口を上にして使用する。
5. 土台は、背を下にして使用する。

〔No. 6〕 木造軸組住宅の施工順序として、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 根太掛け → 床束 → 大引 → 根太
2. 間柱 → 断熱材 → 胴縁 → せっこうボード
3. 建方 → 仮筋かい → 建入れ直し → 本筋かい
4. 側土台 → 間仕切土台 → アンカーボルトの締付け → 火打土台
5. 側桁 → 踏板 → 蹴込み板 → 手摺^{すり}

[No. 7] 図のような丸太材(針葉樹)の木取り位置A～Eにおける木材の乾燥収縮に伴う変形(網かけ部分)として、最も不適当なものは、次のうちどれか。



丸太材の断面図

1. A
2. B
3. C
4. D
5. E

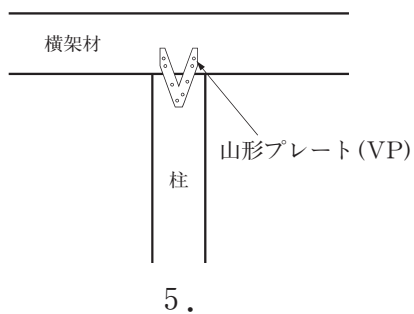
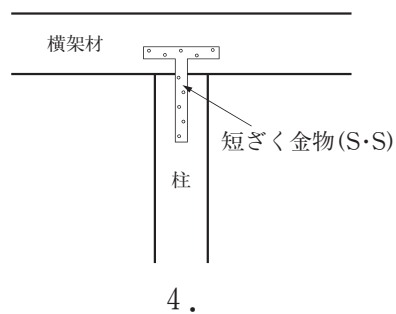
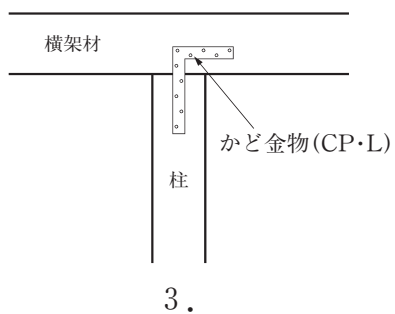
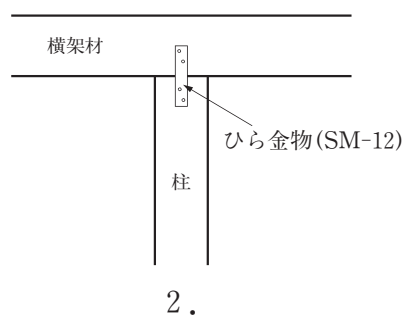
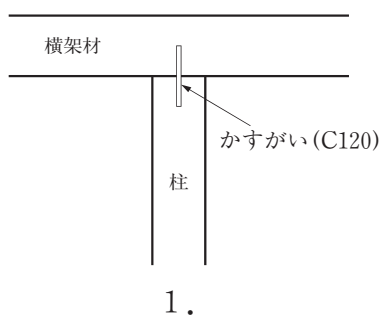
[No. 8] 木造2階建て住宅における合板等の施工に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 大壁造の面材耐力壁において、構造用合板の留付けに当たり、釘打ちの間隔を150 mmとした。
2. 大壁造の面材耐力壁において、ラスシート張りの継目は、横方向の重ね代を1山重ねとし、縦方向の重ね代を30 mmとした。
3. 真壁造の構造用面材として、厚さ9 mmの構造用合板を用いた。
4. 真壁造の構造用面材の受け材の断面寸法は、30 mm×40 mmとした。
5. 構造用面材による床組の補強方法として、床下地材に厚さ12 mmのパーティクルボードを用いた。

〔No. 9〕 木造軸組工法における部材と使用する樹種との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 小屋梁 ————— べいまつ
2. 土台 ————— スプルース
3. 筋かい ————— べいつが
4. 柱 ————— すぎ
5. 敷居 ————— ひのき

〔No. 10〕 木造軸組工法における柱と横架材の仕口に使用されている金物の名称として、最も不適当なものは、次のうちどれか。



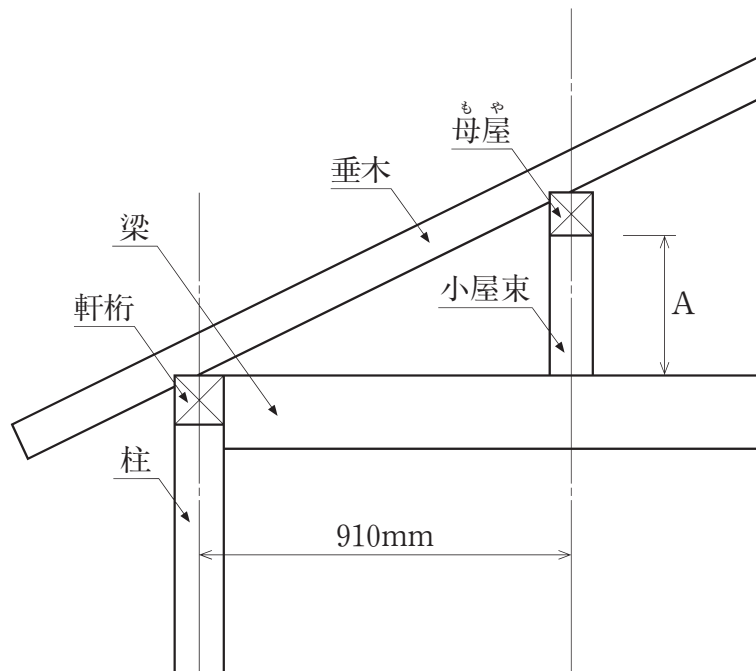
[No. 11] 木造軸組工法における仕口の名称(一般的な使用箇所)とその図との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

	名称 (一般的な使用箇所)	図
1.	短ほぞ差し (柱と土台の仕口)	
2.	大入れ小根ほぞ差し (土台のすみ仕口)	
3.	かぶと蟻掛け (小屋梁と軒桁の仕口)	
4.	大入れ蟻掛け (土台のT字取合い仕口)	
5.	かたぎ大入れ (火打土台仕口)	

[No. 12] 木造軸組工法における各部材の接合部に用いられる継手として、最も不適当なものは、次のうちどれか。

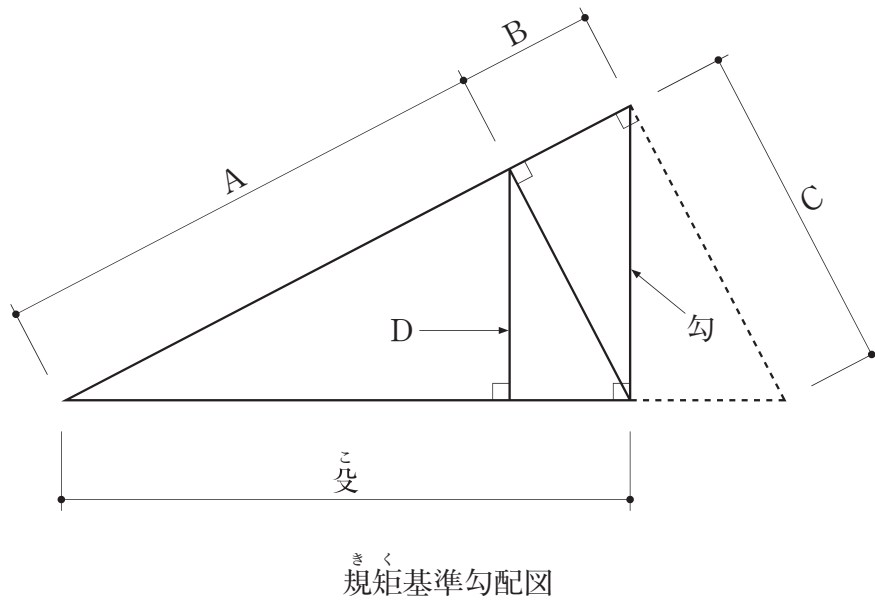
1. 竿縁 ————— ^{いすか} 鶺継ぎ
2. 柱の根継ぎ ————— 金輪継ぎ
3. 軒桁 ————— 追掛け大栓継ぎ
4. 母屋 ^{もや} ————— そぎ継ぎ
5. 小屋梁 ————— 台持継ぎ

[No. 13] 図のような木造住宅の小屋組において、Aの寸法として、正しいものは、次のうちどれか。ただし、屋根の勾配は4寸勾配であり、軒桁心から小屋束心までは910mmとする。また、峠は軒桁、母屋上端とし、母屋の断面寸法は90mm×90mmとする。



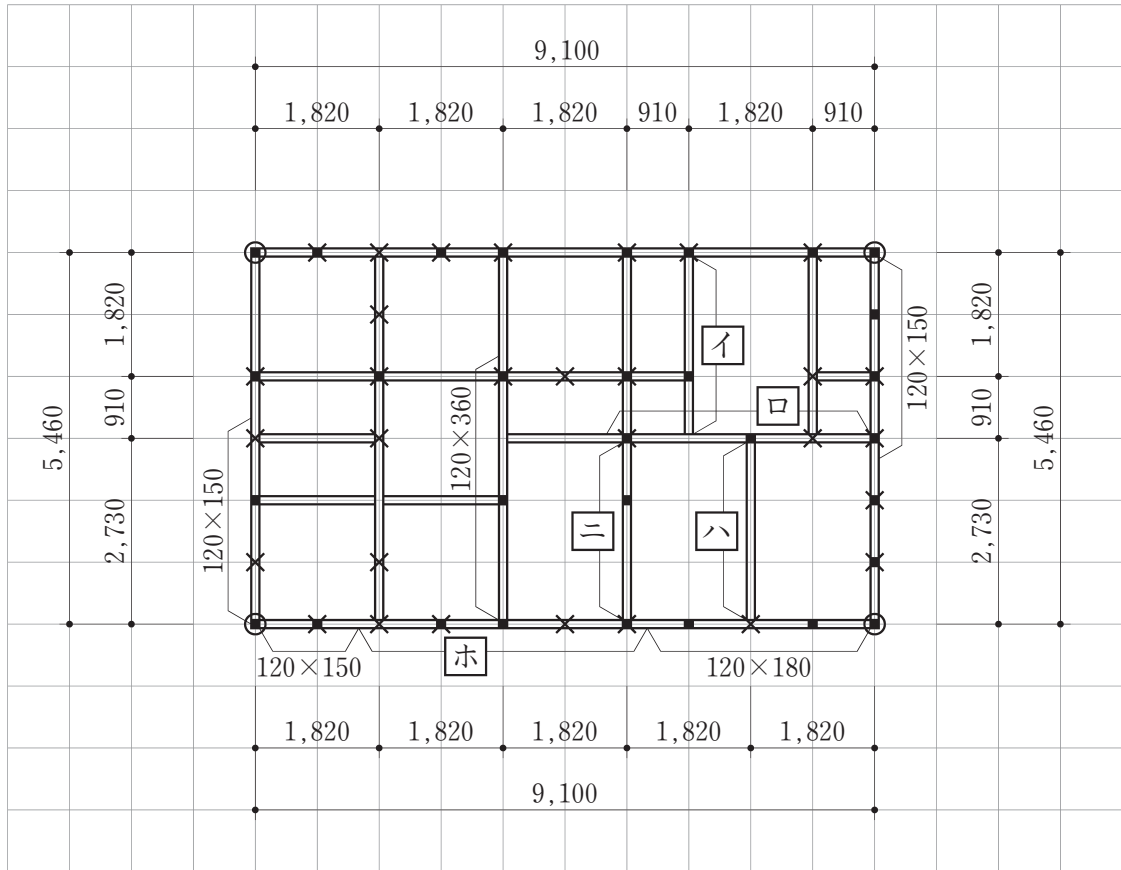
1. 214 mm
2. 245 mm
3. 274 mm
4. 364 mm
5. 455 mm

[No. 14] 規矩基準勾配図における線分A～Dとその名称との組合せとして、正しいものは、次のうちどれか。



	A	B	C	D
1.	短 玄	長 玄	欠 勾	補 玄
2.	長 玄	補 玄	欠 勾	短 玄
3.	補 玄	短 玄	長 玄	欠 勾
4.	長 玄	短 玄	補 玄	欠 勾
5.	長 玄	短 玄	補 玄	中 勾

[No. 15] 図のような木造2階建て住宅の2階床伏図において、部材「イ」～「ホ」とその断面寸法(幅mm × せいmm)との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。ただし、建築物は多雪区域以外の一般地域内に建つものとし、根太及び火打梁の表示は省略している。また、添え梁(枕梁)等はないものとする。

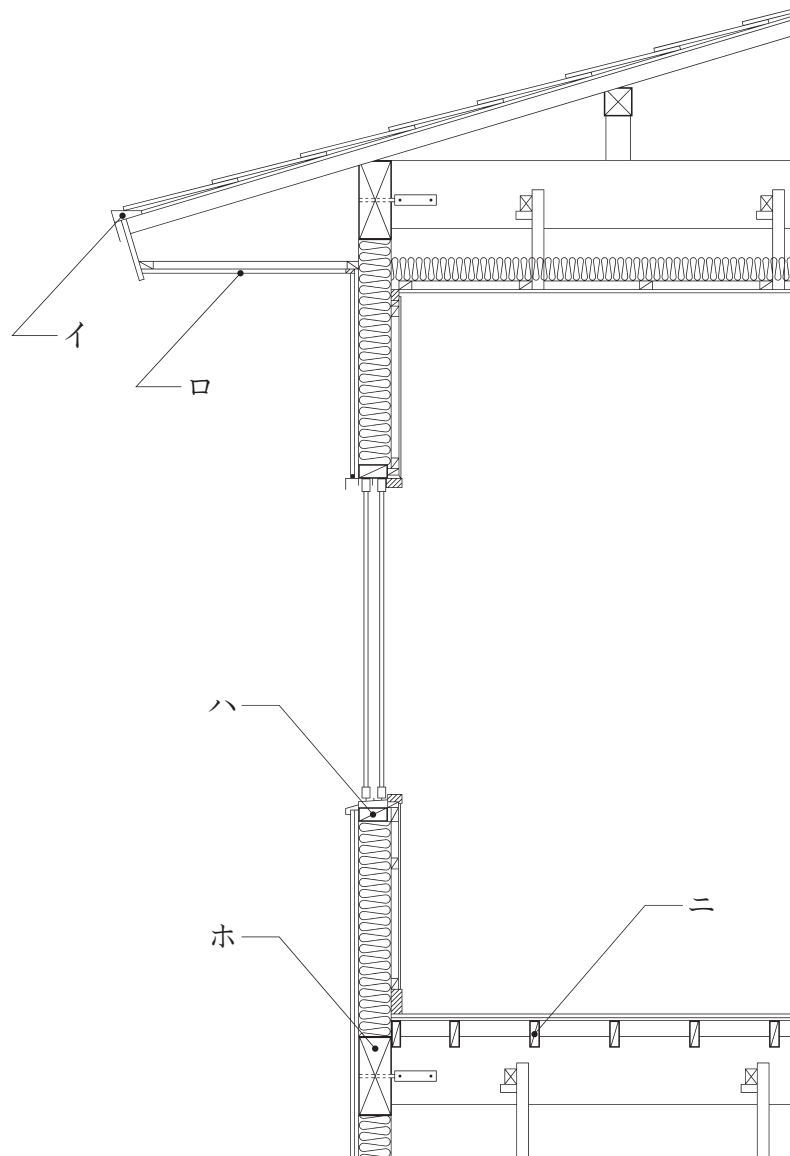


(単位：mm)

凡例	表示記号	通し柱	1階の管柱	2階の管柱	1階と2階が重なる管柱	胴差・2階床梁	
						(正角材)	(平角材)
		⊙	×	■	⊗	—	—

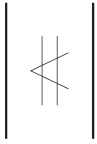
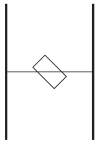
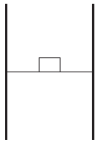
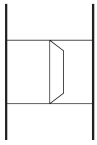
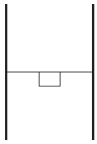
1. イ ————— 120 × 270
2. ロ ————— 120 × 300
3. ハ ————— 120 × 240
4. ニ ————— 120 × 270
5. ホ ————— 120 × 180

[No. 16] 図のような木造2階建て住宅の断面詳細図における部材イ～ホの名称として、最も不適当なものは、次のうちどれか。



1. イ ————— 広小舞
2. ロ ————— 軒天井
3. ハ ————— 額縁
4. ニ ————— 根太
5. ホ ————— 胴差

〔No. 17〕 木工事における柱の墨付けに使用する合印とその名称との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

	合 印	名 称
1.		岐墨印
2.		水墨印
3.		鴨居印
4.		貫印
5.		敷居印

〔No. 18〕 木造住宅における屋根工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

- 化粧スレート葺板の切断については、押切りカッターにより行った。
- 金属板たてどい受金物は、取付け間隔を 900 mm とした。
- 金属板一文字葺の隣り合った葺板相互の接合は、一重はせ継手とし、千鳥に配置した。
- 金属板の留付けに用いる釘は、葺板と同系材料のものとした。
- 下葺に用いるアスファルトルーフィングの左右(長手方向)の重ね幅は、100 mm とした。

〔N o . 19〕 木造住宅のタイル工事及び左官工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 壁のタイルの圧着張りにおいて、一般の平壁部分は、上部から下部へ張り進めた。
2. 壁のタイルの接着剤張りにおいて、目地直しは、張り付けたタイルが自由に動く間に行った。
3. モルタル塗りに用いる砂は、中塗り用を荒目のもの、上塗り用を細目のものとした。
4. コンクリート下地のセメントモルタル塗りの壁において、上塗りには、下塗りより貧調合のモルタルを使用した。
5. 屋外で施工するに当たり、接着効果を促進させるため、張付け後のタイルを直射日光に当てて養生した。

〔N o . 20〕 塗装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 木部のクリヤラッカー塗りに当たっては、下塗りとしてウッドシーラーを塗布し、研磨紙すり後、上塗りを行った。
2. 合成樹脂エマルジョンシーラーの希釈には、水道水を用いた。
3. 油性ステイン合成樹脂ワニス塗りに当たっては、合成樹脂ワニスを塗った後、油性ステイン塗りを行った。
4. コンクリート外壁面は、マスチック塗材塗りとした。
5. コンクリート面には、合成樹脂エマルジョンペイントを2回塗りした。

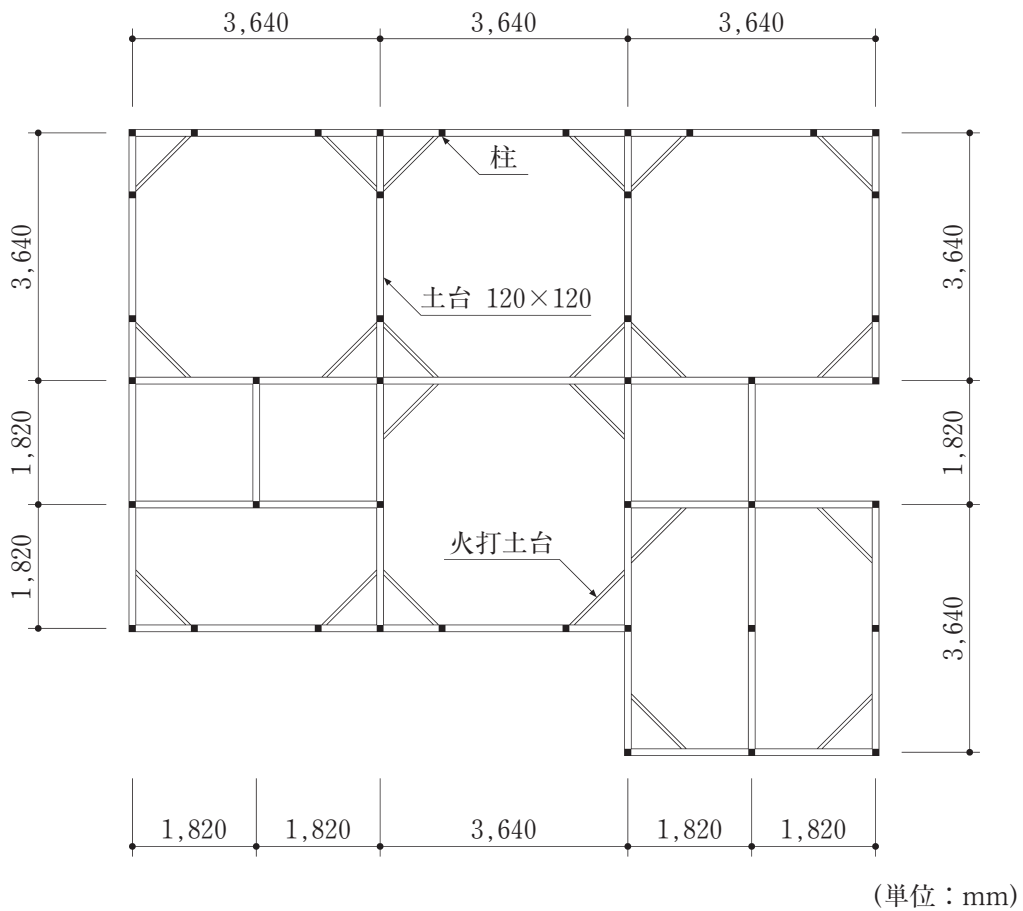
〔N o . 21〕 木造住宅の建具工事及び内装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 高さ 2.1 m の一般的な木製開き戸の取付けに、ステンレス鋼製の丁番を 2 枚使用した。
2. 壁紙張りの下地となるせうこうボードの継目を、突付けとした。
3. フローリングボードの直張りにおいて、下張り用床板にウレタン樹脂系の接着剤を塗布した後に釘を用いて張り込んだ。
4. 木製フラッシュ戸の表面材に用いる普通合板の厚さを、4.0 mm とした。
5. 打上げ天井の板そばは、相じゃくりとし、幅割合せとした。

[No. 22] 下に示す木造住宅の土台伏図において、イ～ニの条件のもとで算定した土台に用いる材料の必要本数(定尺4m材の必要本数)の値に最も近いものは、次のうちどれか。

条件

- イ. 材料の定尺は4mとする。
- ロ. 継手、仕口は考慮しない。
- ハ. アンカーボルト、換気孔、人通口等の位置は考慮しない。
- ニ. 火打土台は考慮しない。



1. 18本
2. 22本
3. 26本
4. 30本
5. 34本

〔N o. 23〕 木造住宅の設備工事に関する次の記述のうち、**最も不適当な**ものはどれか。

1. 屋外への排水管は、基礎コンクリートに埋設したスリーブ管の中に通して設置した。
2. 屋内排水管は、満水試験において保持時間が60分経過した後、衛生器具を取り付け、通水試験を行った。
3. 寒冷地以外の一般敷地内における給水管の地中埋設深さは、特記がなかったので、土かぶりを300mmとした。
4. 給湯用配管は、管の伸縮が生じないように堅固に固定した。
5. ユニット型浄化槽の埋戻しは、槽内に半分程度注水した後、良質土を用いて行った。

〔N o. 24〕 木造住宅の工事における施工機械・器具の使用に関する次の記述のうち、**最も不適当な**ものはどれか。

1. 鉄筋の結束線締めには、ハッカーを用いた。
2. 木材の表面の平滑仕上げには、サンダーを用いた。
3. 木材の表面削りには、プレーナーを用いた。
4. 木材の面取りや溝付けには、トリマーを用いた。
5. 木材の孔あけには、ラチェットレンチを用いた。

〔N o. 25〕 仕様書及び設計図書に関する次の記述のうち、**最も不適当な**ものはどれか。

1. 仕様書においては、使用する材料のメーカーを指定することができる。
2. 設計図面の内容は、一般に、特記仕様書に優先する。
3. 設計図書には、質問回答書が含まれる。
4. 市販の標準仕様書については、施主との合意のうえで、内容を一部訂正して使用することができる。
5. 仕様書は、工事請負契約書類の一部である。

